

〔論文〕

## 千崎如幻の後半生と欧米人來日禪修行

——円福寺 Zen Hospice の設立と三宝教団修行ルートの確立

末村正代

SUEMURA Masayo

本稿は、20世紀初頭に渡米し、アメリカで約半世紀にわたって禪の開教に従事した千崎如幻（1876–1958）の後半生を跡づけることを目的としたものであり、その前半生を論じた拙稿<sup>1</sup>の続編となる。前半生につづく1940年代以降、主に太平洋戦争下の強制収容所内での活動と、戦後のロサンゼルスでの活動を取り扱う。戦中の日系移民研究や、戦後の禪ブーム研究の領域ではすでに一定の成果が蓄積されており、千崎に言及する資料もいくつかあるが、いずれも断片的な紹介にとどまる<sup>2</sup>。本稿では、より包括的な千崎の伝記の確定を試みる。

あわせて今回は、20世紀の北米禪拡大の仕組みに関係する二つの事象を取り上げる。京都八幡・円福寺 Zen Hospice の設立と、欧米人禪指導者の育成を担った三宝教団修行ルートの確立である。居士林として構想された大戦間期の Zen Hospice と、専門道場に近い役割を担った戦後の三宝教団ルートは相違もあるが、いずれも日本の側で起きた事象である点で共通している。北米禪は、渡米した日本人禪者による開教からはじまったが、その拡大を加速させたのは、來日修行を経た欧米人禪指導者の存在である。禪としての伝統的な核は残しつつ、いかにして非東洋圏の人々が参入しやすい環境を整備する

---

1. 末村正代「千崎如幻の前半生と北米開教——九三〇年代以前を中心に」『近代仏教』30、2023年、189–213頁。

2. 近年では、Duncan Ryūken Williams, *American Sutra: A Story of Faith and Freedom in the Second World War* (The Belknap Press of Harvard University Press, 2019) が、比較的大きく千崎を取り上げている。日本人かつ仏教徒という二重のマイノリティであった日系人仏教徒が、太平洋戦争下でいかなる苦痛を被り、いかにして信仰を守り、救われたかを論じる。千崎にフォーカスするわけではないが、冒頭で“Thus have I heard”（如是我聞）ではじまる千崎の詩“Parting”を引用し、結びで再度千崎に言及。千崎の詩に関しては、悲惨な時代にインスパイアされ、現代的表現で語り直された新しい仏典、彼が残した教えであると、きわめて積極的に評価。

か、また彼らを指導者としてどう育成するか、これらは在米の日本人禅者だけでなく、迎え入れる日本側も直面せざるを得ない問題であった。北米禅は、日米両国の試行錯誤が交わるところで、インタラクティブに形成されている。本稿では、千崎の後半生を跡づけるとともに、これらの取り組みの一端を明らかにしたい。

## 1. 千崎如幻の後半生

はじめに、ごく簡単に千崎の前半生を振り返っておきたい。千崎如幻(俗名愛蔵)は、1876年に青森県北津軽郡十三村で出生、幼少期から青年期にかけて青森で過ごし、親戚の浄土宗寺院、得度をした曹洞宗寺院、東奥義塾で触れたキリスト教など、複数の宗教・宗派に触れる。20代前半で上京した後は、主に鎌倉・円覚寺で釈宗演に参禅する。なお、同時期には大拙も円覚寺に寄宿している。その間、故郷に「仏苗学園／福田会」という私塾を開設したものの、日露戦争による資金難で渡米を決意、1905年、アメリカ講演旅行に向かう宗演の後を追う形で渡米、この折には、通訳としてラサールから駆け付けた大拙とも合流している。その後、早々に宗演一行と離れた千崎は、西海岸で十数年辛酸をなめたが、1920年代に入ると、サンフランシスコで開教に着手する。初期は、貸しホールを一時的に借りる「浮遊禅堂 Floating Zendo」、1928年には居を定めて自らの禅堂「東漸禅窟」を開設、日本語や日本文化を教授する「群英学園」も併設した。1930年代にはロサンゼルスに移り、安定した開教を展開、当時としては異色、かつ現代から見れば先進的な欧米人開教に注力した。欧米人の得度式や、日本文化に関する公開イベントの様子は、英字紙でもたびたび報じられている。

### 1-1. 太平洋戦争下の強制収容

1928年に東漸禅窟を開設し、1931年にロサンゼルスに移って以降、1940年代に入っても千崎の活動は概ね順調であった。邦字紙や英字紙では、欧米人弟子の得度や、高野山米国別院でおこなわれた真言宗八千枚護摩供への参加、浄土真宗本願寺派僧侶ジュリアス・ゴールドウォーター (Julius Goldwater) との講演、南加米人仏教徒主催の八雲忌での講演などが報じられている<sup>3</sup>。

3. 弟子ロバート・ミッチェルの得度式は『新世界朝日新聞』1940年4月10日4面、高野山米国別院のローランド・ラティマー (Ronald Lane Latimer) の得度式は同紙同年7月20日4面・24日4面、八千枚護摩供は『新世界朝日新聞』1940年10月23日4面(「千崎如幻師の尽力により五百名の米人が参詣し同時に米人僧の講演」とある)、“Buddhists to Hold Fire Ceremony,” *Los Angeles Times*, October 24, 1940: 14. ゴールドウォーターとの講演は“Lecture on Buddha,” *Los Angeles Times*, July 18, 1941: 3. 八雲忌は『日米新聞』1941年9月28日6面、“Buddhist Program,” *Los Angeles Times*, September 27, 1941: 3. なお、ラティマーは、文芸誌 *Alcestis: A Poetry Quarterly*

アメリカ時間 1941 年 12 月 7 日、真珠湾攻撃を発端とする太平洋戦争開戦によって、状況は一変する。千崎の動向を述べる前に、開戦以降、すべての日系人に課された強制収容についてごく簡単に触れておきたい<sup>4</sup>。日系人の強制収容は、開戦翌年の 1942 年 2 月 19 日、フランクリン・ルーズベルトが大統領行政命令第 9066 号に署名したことにはじまる。特別権限を与えられた軍司令官は、3 月 24 日に米国陸軍西部防衛司令部から民間人排除命令第 1 号および夜間外出を禁止する告示第 3 号を発出、西海岸に住む「日本人を祖先に持つすべての住民」は「敵性外国人」となった。日系一世だけでなく、アメリカ市民権を有するはずの二世や三世も含む 11 万 2 千人が、ほぼすべての財産を捨て、軍が設置した仮設の集合センター (Assembly Centers) に移ることを余儀なくされた。5 月 26 日からは、集合センターから戦時転住局 (War Relocation Authority: WRA) が管轄する強制収容所 (Relocation Centers / Concentration Camps) への移動がはじまり、10 月 30 日にすべての移動が完了、以降、日系人は終戦まで強制収容所に隔離される。

千崎は、開戦一週間後の 1941 年 12 月 14 日に以下の声明を発表、英字紙で取り上げられている<sup>5</sup>。

ターナー通り 441 番地にある Mentorgarten (群英学園) の僧侶、千崎如幻は昨日、緊急事態のため公開集会を中止すると発表した。しかし、建物内の禅堂 (東漸禅窟) は、毎日午前 7 時から午後 6 時まで信者に開放する予定。

実際にどれほどの人数が集まったかは定かではないが<sup>6</sup>、日系人と他民族の分断、孤立が一層深まることは容易に予測できたはずである。事実、その年の暮れには日系人を狙う事件が多発、年明けには日系人への警戒心が高まり、強制退去を求める声が大きくなっている。そうした事態が迫るなかで、敢えて、上記の声明を発表した点に、東漸禅窟という多民族の集まりを主宰する千崎の矜持が窺える。

とはいえ、日系人である千崎にとって、隔離は不可避であった。はじめに、カリフォルニア州サンタアナ集合センター、次にワイオミング州ハートマウンテン収容所に移

---

(1934-) の編集者であり、Wallace Stevens らモダニズム詩人とも交流があった人物。

4. 日系人の強制収容は、以下参照。『大統領命令第 9066 号——日本人及び日系米人強制収容の記録』西武百貨店文化事業部、1975 年。山倉明弘「資料紹介 日系人封じ込め——米国政府による本土・ハワイ日系人戦時対策詳細年表」『天理大学学報』52、2000 年、169-189 頁。

5. “Buddhist Institution Ends Public Meeting,” *Los Angeles Times*, December 14, 1941: 2. 邦訳引用者。

6. 同日、成道会をおこない詠詩。Nyogen Senzaki, *Like a Dream, Like a Fantasy: The Zen Writings and Translations of Nyogen Senzaki*, Eido Shimano(ed.), Japan Publications, 1978, p. 26.

り、終戦まで収容される。当時の動向を示す有益な資料が、詩歌<sup>7</sup>である。戦前から千崎は、法要のたびに詩歌を作り、弟子に配布するほどの歌詠みであった。強制収容期はとりわけ多作で、数多くの作品が残されている。それぞれに日付と場所が記されているうえ、時事的な内容が多く、当時の状況を推し量る手がかりとなる。

これらの詩歌にもとづき、移動の日程と経路を可能な限り確定したい。先述の通り、開戦後もしくは東漸禪窟を開放し、活動を継続していた。これに終止符が打たれるのが1942年5月7日、“Parting” (別れ)<sup>8</sup>と題された作品の末尾には、この日が禪窟最後の集まりである旨が記されている。漢詩の題目は「送行」で、行脚に出る僧侶を見送ること(叢林を出ること)を意味する。強制退去の過酷さと同時に、そこから開かれる新たな修行と出会いを予感させる作品である。1942年7月にはサンタアニタと記された作品があり、2ヶ月後に同所の集合センターに入ったことがわかる。さらに2ヶ月後、1942年9月の作品には「サンタアニタからハートマウンテンへ」(漢詩の題目は再び「送行」)<sup>9</sup>とあり、ワイオミング州のハートマウンテン強制収容所に移っている。いずれも、ひと家族と同居していたようであるが、自室を「恵鏡庵」と名づけて日々読経・坐禅し、10月達磨忌、11月楞伽忌(楞伽窟釈宗演の法要)、12月成道会など、東漸禪窟の活動を継続していた<sup>10</sup>。変化が訪れるのは1942年12月20日、「ワイオミング禪堂開設にあつ

7. ここで取り上げる作品の多くは、一枚の紙の上部にタイプされた英訳と場所・日付、下部に手書きの漢詩と落款が入る。弟子に安名を与える際にも、同様の書面を贈っている。弟子の本名や書き下し文がメモされている場合もある。一枚の紙を「場」として、邦文・漢文・英文が入り交じる様子は、多様なルーツをもつ人々が集う東漸禪窟の multiplicity を象徴している。Like a Dream, Like a Fantasy には多くの詩歌が掲載されているが、漢詩や書き下し文を省いて翻刻されているため、紙から放たれる当時の気配が霧散しているように思われる。他方、Nyogen Senzaki, *Eloquent Silence: Nyogen Senzaki's Gateless Gate and Other Previously Unpublished Teachings and Letters* (Roko Sherry Chayat(ed.), Wisdom Publications, 2008) は画像を多用し、魅力を上手く伝えているが、掲載数が少ない。また、英語文献である Like a Dream, Like a Fantasy や Eloquent Silence は、英文付きの作品のみ取り上げる傾向にあるが、千崎は邦文のみで書かれた短歌も多く残している。UCLA 図書館の Ruth Strout McCandless collection on Nyogen Senzaki (UCLA Library Special Collections, Charles E. Young Research Library, University of California, Los Angeles, Collection 2296, 以下「UCLA 千崎コレクション」と略記) は、多くの未発表作品を所蔵。

8. Nyogen Senzaki, *Like a Dream, Like a Fantasy*, p. 51. Duncan Ryūken Williams, *American Sutra*, p. 1.

9. Nyogen Senzaki, *Namu Dai Bosa: A Transmission of Zen Buddhism to America*, Louis Nordstrom(ed.), Theatre Arts Books, 1976, p. 14.

10. 連載「千崎如幻の手紙——中川宋淵老師宛書簡」1-13 (『禅文化』135-154, 1990-1994年) には、戦後の東漸禪窟の様子を伝える書簡が多く含まれるが、そのなかに「恵鏡」の名がある。ハートマウンテン初期は、おそらく弟子である恵鏡の家族と同居していたと考えられる。本稿はこの『禅文化』連載から多数引用するため、以下、当該連載からの引用は、[禅文化 号数/頁数]と略記する。千崎と中川の交流に関しては後述。

て」と題された作品（漢詩題目「東漸禅窟開単」）、収容所内に「ワイオミング禅堂」を開設するという内容である<sup>11</sup>。所内の様子は後述するが、この機に収容所から個室が与えられたようである。ここで終戦まで、折々の法要、坐禅、読経、詩作の日々を過ごす。1945年8月15日の作品は「禅堂閉単」<sup>12</sup>、千崎が「大悲山」と呼んだハートマウンテン収容所の鉄柵が開き、囚われの「苦修人」たちが、衆生済度に向けて自由に動き出せる日を迎えたことを詠んでいる。いつハートマウンテンを出たかは特定できないが、出所後、しばらくは文献の保管を依頼していた弟子、Ruth Strout McCandless（寒月）<sup>13</sup>のパスadenaにある自宅に身を寄せていたようである。1945年9月17日と10月5日の作品には、パスadenaと記されている。その後、収容所仲間であったリトルトーキョーのミヤコホテル支配人、石川武義<sup>14</sup>から、ホテル最上階の部屋を無償で提供され、戦前の活動を再開する。

それでは、収容所内では、いかなる活動をしていたのか。UCLA 千崎コレクションには、「東漸禅窟」の木札がかかった部屋の前に立つ千崎の写真や、禅窟に通っていたであろう日系人との集合写真がある<sup>15</sup>。もっとも人数が多い写真には、約30名が並ぶ。弟子の棚橋秋旻が「先生は毎朝坐禅とお話の会をお開き下さいましたが、それがどれ位私たちの慰めになったことでしょうか。キャンプの米人事務官たちも大変先生を尊敬していました」<sup>16</sup>と述懐しているように、毎日禅窟を開け、参禅者を受け入れていた。所内の週刊紙『ハートマウンテン・センチネル』が企画したシリーズ・フォーラムの第一弾、仏教・カトリック・プロテスタント鼎談にも、仏教者代表として登壇している<sup>17</sup>。また、

11. Nyogen Senzaki, *Eloquent Silence*, p. 328. UCLA 千崎コレクションには、同内容で別バージョンの作品があり、こちらには収容所の部屋番号（2-9-BX）も付記。

12. Nyogen Senzaki, *Eloquent Silence*, p. 338.

13. 1941年12月に千崎が授戒した弟子で、*Buddhism and Zen* (Nyogen Senzaki and Ruth Strout McCandless (comps., eds. and trs.), Philosophical Library, 1953) や *The Iron Flute: 100 Zen Kōans* (Nyogen Senzaki, Ruth Strout McCandless (eds. and trs.), Charles E. Tuttle, 1961) の共編者。千崎の唯一の帰国（1955年）に同行し、翌年も来日。UCLA 千崎コレクションは、彼女が収集した千崎の原稿、書簡、詩歌、写真などから成る。Nyogen Senzaki, *Eloquent Silence*, pp. 13-16.

14. USC Shinso Ito Center, *The Ireizō*, <https://ireizo.com/>, accessed May 5, 2023.

15. Box 13, Folder 2,3,6, Ruth Strout McCandless collection on Nyogen Senzaki (Collection 2296). UCLA Library Special Collections, Charles E. Young Research Library, University of California, Los Angeles.

16. 棚橋秋旻「千崎如幻先生のこと」『禅文化』27・28 合併号、1963年、64頁。棚橋秋旻に関しては、嶋野栄道「勝縁曼陀羅 棚橋秋旻大姉のこと」『禅文化』153、1994年、28-54頁。

17. “Inter-fatih Forum Favorable Received,” *Heart Mountain Sentinel*, February 13, 1943: 3. もちろん、収容所内には日系教団の仏教団もあった。『ハートマウンテン文藝』最終号「はあと山あの日この日」には、1942年11月29日「ハート山仏教団発会式」などの記載がある。「はあと山あの日この日」『ハートマウンテン文藝』1944年9月号、41-51頁、『日系アメリカ文学雑誌集成』7、不



文芸誌『ハートマウンテン文藝』にも、ほぼ毎号寄稿している。1944年1月創刊号には「プラグマテズムと禅」、2月号「プラグマテズムと禅(続)」、3月号「拙僧の話」、4月号「拙僧の話(続)」、5月号「セイロンとはどんな国か」(著者N・S生はNyogen Senzakiと推定)、最終号9月号「江戸の児の支那僧 蘇曼珠」である。山本岩夫は、戒律の緩い日本人僧侶と彼らのもとの受戒する欧米人弟子を「似て非なる比丘」と喝破する「拙僧の話」を心に残る記事として取り上げ、「本願寺を、そして暗に日本の東亜共栄圏政策を批判している点が興味深い」<sup>18</sup>と評している。一風変わった活動としては、居住者への教訓として、千崎が作成した「新撰伊呂波短句」がある<sup>19</sup>。対象は子どものようであるが、「日本は恥ずることなし」や「塵を払うて立ちあがれ」、「兵隊は命を惜しまず」、「憲法はアメリカの命」など時事的なものから、「波はそのまま水」、「浮世は禅堂」、「縁起は心から」、「光は東から」と仏教的なものまで、端的かつ真率な句が並ぶ。

以上、ハートマウンテン収容所における千崎の主な活動である。筆者の能力上、彼の詩歌の文学的価値を読み解くことは難しいが、当時の日系人作品と比べて特筆すべきは、欧米人に向けて書かれたものを多く含む点にある。日本人であることを否応なしに突きつけられる状況で、その出自を強く意識させる作品も見られるが、基本的には仏教精神を詠むものが多く、邦文・漢文・英文が入り混じる形式も変わらない。禅を紐帯とする多民族の集まりが、人種的隔たりと怨嗟を越えて、断絶することなく戦後に引き継がれたことを示す資料と言える。

## 1-2. 戦後、禅ブームと大拙との交流

戦後の千崎の活動について述べる前に、当時の潮流に触れておきたい。戦後から没年の1958年、千崎の晩年はアメリカで興った「禅ブーム」の時期と重なっている。1949年のハワイ大学講義を皮切りとする大拙のアメリカ諸大学講義・講演、大拙の*Essays in Buddhism*全3巻<sup>20</sup>の出版(1927-1934年)、R. H. ブライスの*Haiku*全4巻<sup>21</sup>の出版(1949-1952年)などを引き金として、知識人や若者のあいだで仏教、とりわけ禅に対する関

二出版、1997年。ただ、藤岡紫朗によると、仏教団には諍いもあったようで、「精神界の指導者たる地位にありながら、戦時不安に悩む人心を和平に導こうとはせず、逸早くチャンスを掴んで外部に逸出して、後は野となれ山となれといわんばかりの冷淡なる態度を見ては、勢い公憤の念に駆られざるを得ない」と批判している。藤岡紫朗『歩みの跡——北米大陸日本人開拓物語』歩みの跡刊行後援会、1957年、217頁。

18. 山本岩夫「解題 詩とエッセイの文芸誌『ハートマウンテン文藝』」『日系アメリカ文学雑誌集成』7、前掲、17頁。

19. 藤岡紫朗、前掲、222-223頁。

20. Daisetz Teitaro Suzuki, *Essays in Zen Buddhism*, 1st, 2nd and 3rd ser., Luzac, 1927-1934.

21. Reginald. H. Blyth, *Haiku*, vol. 1, 2, 3 and 4, Hokuseido, 1949-1952.

心が高まった。ブーム幕開けの象徴として語られるのは、1955年10月7日、サンフランシスコのシックス・ギャラリーで開かれたビート世代による朗読会であり、そこでアレン・ギンズバーク（Allen Ginsberg）が朗読した“Howl”（吠える）という自作詩である<sup>22</sup>。

戦後、ロサンゼルスに戻った千崎は、禪ブームの真只中を生きた<sup>23</sup>。とはいえ、機に乗じる気質ではなかったようで、大掛かりなプロモーションをした形跡はなく、禪窟に集う人数が急増した様子もない。しかしながら、ブームによる若干の影響も見受けられる。一つには、禪関連の大衆書の出版である。内容は、禪窟の法話で用いていた禅籍の英訳が多い。戦後の出版物としては、*Buddhism and Zen*、*The Iron Flute: 100 Zen Kōans*、*Zen Flesh, Zen Bones: A Collection of Zen and pre-Zen Writings* (Paul Reys and Nyogen Senzaki (comp.), Tuttle Publishing, 1957) があるが、とくに *Zen Flesh, Zen Bones* に再録されている *101 Zen Stories* (Nyogen Senzaki and Paul Reys (trs.), David McKay Company, 1940) はイタリア語（2005年）、スペイン語（2012年）、カタルーニャ語（2017年）、フランス語（2019年）に翻訳されており、欧米の主要な禪関連書籍のうちの一冊となっている。もう一つは、禪窟に新顔が出入りしはじめた点である。戦後の中川宋淵宛の千崎書簡には、法要の報告がたびたび記されているが、1950年代半ば以降、来会者のなかに「パサデナ住人」、「オハイ住人」、「無名氏」、「名を知らぬもの多し矣」[禅文化 143/57] などの記述が増える。当時通いはじめた欧米人弟子のなかに、ロバート・エイトケン（Robert Aitken）など、後の欧米禪で重要な役割を担う人物もいた<sup>24</sup>。また、1952年と翌年には、スタンフォード大学のフレデリック・シュピーゲルベルク（Frederic

22. 禪ブームを加速させた記事の一つが、“Great Simplicity: Dr. Daisetz Teitaro Suzuki”(New Yorker, August 31, 1957)。その解説と邦訳は、岩本明美「ウインスロップ・サージェント「グレート・シンプリシティ——鈴木大拙博士のプロフィール——」紹介と翻訳」、山田奨治、ジョン・ブリン編『鈴木大拙 禅を超えて』思文閣出版、2020年、359-386頁。1953年出版のサリンジャー（J. D. Salinger）の短編集、冒頭で白隠慧鶴の公案「隻手音声」を引いた *Nine Stories* はブームの嚆矢。

23. ミヤコホテルを離れた時期は特定できないが、戦後の住所は、2014 East Second Street, Los Angeles, California、弟子の秋旻宅に間借りしていた。

24. 本稿は、千崎と北米禪を主題とするため、日系人弟子は取り上げないが、著名人を一人紹介しておきたい。アメリカで茶道の普及に貢献した、松本宗静である。1951年6月に創立された裏千家羅府茶道支部の副支部長で、実質的な支部責任者。1990年勲五等瑞宝章、1994年アメリカ国立芸術基金 National Heritage Fellowship（日本の人間国宝に相当）選出。1950年代に、エイトケンの仲介で東漸禅窟に通いはじめたヘンリ・ミトワ（Henry Mittwer 後に禅僧となり天龍寺塔頭南芳院に入寺）が、千崎から松本を紹介されたこと、当時は欧米人弟子が多く、松本は数少ない日系人求道者の一人であったことを述懐している。千崎は上記支部の初代役員にも顧問として名を連ねる。南加州日本人七十年史刊行委員会編『南加州日本人七十年史』南加日系人商業会議所、1960年、329-330頁。ヘンリ・ミトワ『祖国と母国のはざままで——わが母影慕情』サンケイ出版、1983年、第3章。理由は定かではないが、数ある日系教団の寺院ではなく、東漸禅窟を選んだ点は興味深い。

Spiegelberg)<sup>25</sup>に招待されて、講義もおこなっている。同大学所蔵資料<sup>26</sup>によると、禪窟の法話に近い内容であったと考えられるが、“200 copies”という走り書きを見る限り、受講者は比較的多かったと推測される。茶道具を持参する旨が記されたシュピーゲルベルク宛の千崎書簡もあり、茶道の実演もおこなったようである。

禅ブームの花形として時代の寵児となった大拙とも、戦後に本格的な交流が再開される。千崎と大拙は円覚寺修行時代に少なくとも一夏を過ごし、1905年の宗演アメリカ講演時にも、短期間ではあるが、顔を合わせている。その後の詳細は不明であるが、最初の交流再開の痕跡は、1931年9月24日の大拙英文日記“Letters to Goddard, Senzaki, Abbot Gyodo, &c.[.] concerning friction between Abbot and Senzaki, ……”<sup>27</sup>であろう。“Gyodo”とは、当時東漸禅窟に滞在していた、臨済宗円覚寺派前管長の古川堯道である<sup>28</sup>。一度目の再会、直接の対面は、大拙が世界信仰会議のため1936年に渡英した帰路、アメリカに立ち寄った折であった。「帰途には多少の余裕をおくつもり故、桑港なりロサンゼルスなりにて相見相叶い候かとも存候、何十年振りの事に候、帰路貴国通過は九月中旬頃かと想う」<sup>29</sup>という1936年4月11日付千崎宛の大拙書簡が残っている。その後も、定期的にやりとりがつづき、戦後に入ると、大拙の西海岸滞在時には、千崎がさまざまに世話をする関係となる。1950年代の大拙英文日記には、食事や買い物、文献の貸し借り、空港への送迎など、何度も千崎の名前が登場する<sup>30</sup>。当時の書簡や邦文・

25. スタンフォード大学宗教学講師（後に教授）。1950年代初頭、サンフランシスコで設立された American Academy of Asian Studies (現 California Institute of Integral Studies) の創立メンバー。同アカデミーでは、アラン・ワッツ (Alan Watts) も教壇に立っていた。

26. Box 6, Folder 24, Frederic Spiegelberg Papers (SC0631), Department of Special Collections and University Archives, Stanford University Libraries, Stanford, California.

27. 「D. T. Suzuki's English Diaries」II、『松ヶ岡文庫研究年報』20、2006年、57頁。本稿で使用する「英文日記」の出典は、「D. T. Suzuki's English Diaries」I-XI、『松ヶ岡文庫研究年報』19-29、2005-2015年。「邦文日記」は、桐田清秀編著『鈴木大拙研究基礎資料』所収「年譜」、財団法人松ヶ岡文庫叢書第2、松ヶ岡文庫、2005年、9-227頁。以下、「英文日記」からの引用は〔松ヶ岡年報 号数/頁数〕、「邦文日記」からの引用は〔桐田年譜 頁数〕と略記。

28. 堯道のサンフランシスコ到着後、千崎はサンフランシスコからロサンゼルスに移るが、大拙英文日記1931年8月22日には、二人がうまくいっていないことを鈴木玲（大拙の姪、初子の長男）から聞いたと記されている〔松ヶ岡年報 20/53〕。

29. 『鈴木大拙全集 増補新版』36、岩波書店、2003年、619頁。以下、『鈴木大拙全集 増補新版』（岩波書店、1999-2003年）からの引用は〔大拙全集 巻数/頁数〕と略記。

30. 1950年7月20日には、千崎と3人の弟子とともに、サンタバーバラとオハイに日帰り訪問しており、“interesting”と書き添えている〔松ヶ岡年報 22/22〕。桐田清秀は、大拙の英文日記は原則的には時事問題や所感を記さない「日誌」と呼ぶべき性質のものとしており、このように書き添えることは珍しい。桐田清秀「『全集』の完結にあたって」『鈴木大拙全集 増補新版月報』岩波書店、2003年、9-12頁。



英文日記からは、両者が頻繁に交流していたこと、大拙が千崎の開教を評価していたこと、資料や文献の調達に千崎が協力していたこと、さらに、後述するように、欧米人弟子の來日修行にあたって二人が連携していたことなどが読み取れる<sup>31</sup>。1955年10月、1905年の渡米以来、千崎は約50年ぶりの帰国を果たす。約一ヶ月の滞在では、円覚寺、故郷である青森の深浦や弘前、湊迎寺のある十三村、静岡三島・龍澤寺などをゆっくり巡ったようである。

その最期は、1958年5月7日、家主であった秋旻が、朝になっても現れない千崎の様子を見に行ったところ、静かに息を引き取っていた<sup>32</sup>。葬儀は同月12日におこなわれ、会場では1957年6月16日に録音されていた遺言のテープが流された。千崎自身が日本語版、弟子の西湖が英語版を吹き込んだ“My Last Words”<sup>33</sup>である。内容は、辞世の言葉とその解説に加えて、死後の手続きや遺品整理に関する指示まで含む。先に取り上げた詩歌と同じく、邦文と英文で書かれた書面も遺されている。

Friends in Dharma, be satisfied with your own heads. Do not put on any false heads above your own. The minute after minute watch your steps closely. These are my last words to you.  
Nyogen Senzaki

擬終焉之語

汝等諸人頭上に／頭を安くこと勿れ／唯須く脚下を／照顧せよ  
如幻

同年夏、弟子たちがエバーグリーン墓地に「如幻塔」を建立、中川宋淵が開眼のために

31. 『鈴木大拙全集 増補新版』所収の妻ピアトリス宛書簡や古田紹欽宛書簡でも、千崎に言及。大拙宛の千崎書簡の一部は、古田紹欽「月報31 鈴木大拙宛書翰の中から(31)」(『鈴木大拙全集月報』岩波書店、1980年)所収。コロンビア大学で大拙が講じた華嚴の資料を千崎が送り、宗演全集を大拙が送るといふやりとりも見られる。

32. 棚橋、前掲、64頁。

33. Nyogen Senzaki, *Like a Dream, Like a Fantasy*, pp. 166-169. 今回は左記の文献を用いたが、千崎は1936年の“My Last Words”作成後、何度も修正を重ねたため、同文書には複数の版がある。邦訳は、鈴木宗忠『蜜多余香』龍澤寺僧堂、1990年、100頁。当該文献は非売品であるため、千崎家親族である千崎久男氏からお借りしたものを参照。録音翌日、1957年6月17日付中川宋淵宛の千崎書簡には、「先生眼光落地の時 周章狼狽せぬため密葬(本葬はせぬこと)の時テープレコードをかけて会する人々にきかせ焼香の上アツサリと帰宅していた、くことにきめました かつて活字にした「死んだ跡の始末」を私が読み 英語の遺言書を西湖によませ まとめたものを「棺桶の中から」と命名してしまひ置く考」[禪文化149/127]と綴られている。

渡米し、骨灰の一部も中川によってシャスタ山 (Shasta) の一角に撒かれたという<sup>34</sup>。千崎家親族である千崎久男氏によると、中川は遺骨と遺品を持ち帰り、青森県深浦町にある千崎家の墓に納骨、他にも三島・龍澤寺、中川からアメリカ開教を引き継いだ嶋野栄道が建立したニューヨーク州大菩薩禅堂金剛寺、弟子ヘンリ・ミトワが住した天龍寺塔頭南芳院と、千崎の遺骨は計5箇所眠っているという。

以上、千崎如幻の戦中・戦後の年代記である。千崎の活動は、東漸を宿命とする仏教が、太平洋を飛び越えて、アメリカの一隅に根を下ろしたもっとも初期の事例の一つであった。千崎が生涯崇敬した宗演は、渡米前の若き千崎に向けて、<sup>じょうふきやう</sup>常不軽菩薩のごとき僧侶になってほしいと綴っている<sup>35</sup>。常不軽菩薩とは、『法華経』の「常に他人を軽んじない菩薩」<sup>36</sup>、石を投げられ木で打たれても、「われ敢えて汝等を軽しめず。汝等は皆当に仏と作るべきが故なり」と人々を敬い、礼拝した菩薩とされる。日本人の千崎とアジア生まれの仏教にとってアメリカは、しばしば彼が詩歌でそう詠んだように“strange land”、未知なる辺境であった。他方、当時のアメリカにとっても、仏教は未だ知られざる教えであった。しかし千崎は、未開の地を切り拓き、新しい歴史を刻むアメリカの実践的精神に、仏教の活路を見出していた。常不軽菩薩を範として、互いの未知をすり合わせ、アメリカ仏教固有のあり方を探究した彼の先駆的活動は、北米禅開花の土壌を整え、その成立の一翼を担うものであったと評価することは十分に可能であろう。

## 2. 欧米人の来日禅修行

前項で述べたように、千崎の開教が北米禅の成り立ちに一定の貢献をなしたことは確かである。とはいえ、東漸禅窟のような比較的小規模な禅堂が、一足飛びに現在のような北米禅の隆盛を築いたとも、当然言えない。北米各地に禅堂や禅センターが開設され、多くの欧米人が禅に参入している現状を導くうえで不可欠であったのは、欧米人指導者の存在である。「欧米人による欧米人の禅指導」の実現によって、禅は加速度的に拡大した。

もちろん、これは結果論であり、千崎らパイオニアが欧米人指導者の育成に関して、どこまで具体的なルートマップを描いていたかを正確に知ることはできない。時系列に沿って考えるなら、禅への関心が次第に高まり、来日修行を希望する欧米人弟子が登場

34. 村野孝顕『百年後の米国仏教 再版』ほどけたるものへ社、1979年、92頁。

35. 千崎が青森で開いた私塾「仏苗学園／福田会」に関連して、1901年に発行した小冊子 *A Grass in the Field* (野にほこる一草) に、宗演が寄せた序文。

36. 坂本幸男・岩本裕訳注『法華経 改訂版』下、岩波書店、1976年、134頁。なお、鳩摩羅什の漢訳では「常に他人を軽んじない」菩薩とするが、サンスクリット原典では「常に他の人々から軽んじられていた」菩薩となる。

し、次いで、さらに本格的な修行を望む者が現われ、彼らが年単位での来日修行を敢行して帰国、母国で関連施設を開設して指導者となったという道筋であったと推測される。いずれにしても、東漸禅窟や日系教団のような在米の仏教に飽き足らなかった一部の欧米人が、来日して直に禅に触れたことによって、北米禅は一層大きく開花した。

とはいえ、とりわけ初期の段階では、欧米人の来日修行の受け皿を手配・確保することは容易ではなかった。少数であれば個別対応も可能であるが、禅の大衆化を経て希望者が増加すると間に合わない。以下、そうした欧米人の来日禅修行を受け入れた拠点とルートの事例として、大戦間期に居士林として構想された八幡・円福寺の Zen Hospice と、戦後より本格的な修行者の受け入れを担った三宝教団修行ルートを取り上げる<sup>37</sup>。在米の千崎が直接立ち上げに手を貸したわけではないが、いずれの起点にも千崎の弟子が関わっている。その点についても、ここで明らかにしておきたい。

## 2-1. 居士林、八幡・円福寺 Zen Hospice

はじめに、1932年11月に献堂式がおこなわれた非日本人専用の居士林、京都八幡・円福寺の Zen Hospice<sup>38</sup>を取り上げる。禅の大衆化以前の時期ではあるが、1928年にはサンフランシスコで千崎が、ニューヨークで佐々木指月がそれぞれ始動しており、来日修行を希望する欧米人も現れつつあった。

公益財団法人松ヶ岡文庫のウェブサイトには、吉永進一の解説つきで、1930年11月3日付『外人禅窟建立趣意書』が掲載されている<sup>39</sup>。吉永は、建設実務の最高責任者を円福寺住職かつ臨済宗妙心寺派管長であった神月徹宗<sup>40</sup>、趣意書の執筆者を「その文体や内容からして明らかに鈴木大拙」、そして、緒方宗博とミリアム・サラナーブ (Miriam Salanave) の記事<sup>41</sup>を手がかりとして、発案者を東洋思想に傾倒していた作家アダムズ・

---

37. これらに触れた先行研究として、守屋友江「アメリカ禅の成立」『国際禅研究』8、2022年、229-240頁。

38. 建立趣意書では「外人禅窟」、当時の記録には「外人禅堂」の呼称もある。Hospiceは「宿坊」の意。滞在者の全貌を把握することは難しく、今回取り上げたのはごく一部にとどまるが、よく知られた人物としては、抽象画家マーク・トビー (Mark Tobey) も Zen Hospice 滞在者の一人。柴楽徹「マーク・トビーと東洋」『日本美術工芸』595、1988年、56-61頁。

39. 公益財団法人松ヶ岡文庫「外人禅窟建立趣意書」、[https://www.matsugaoka-bunko.com/ja/member/pamph\\_01.php](https://www.matsugaoka-bunko.com/ja/member/pamph_01.php) (要利用者登録)、2023年4月30日閲覧。

40. 神月徹宗に関しては、秋月龍珉「近代の禅僧と書(六)見性宗般 神月徹宗」『淡交』44(6)、1990年、50-53頁。

41. 緒方宗博「故神月徹宗禅師と外人求道者」『海外仏教事情』4(9)、1937年、1-2頁。吉永の解説によると、サラナーブの記事は、雑誌『カナダ神智学徒』に宛てた1931年2月3日付書簡 (*Canadian Theosophist*, vol. xiv, no. 2, April 15, 1933)。

ベック (L. Adams Beck)<sup>42</sup>と推定している。以下、緒方からの引用である。

抑々老師が外人説得に一肌ぬぐ事になつたに就いては故アダムズ・ベック女史等の慫慂が与つて力あつたと思はれる。女史は人も知る如く、東洋哲学物語(邦訳あり)を始め多数の著作があり……欧米では随分沢山の読者があつて禅に関する照会や、研究の為日本へ行き度いから適當の寺を紹介して欲しいと言ふ様な手紙が舞ひ込んで来たので、女史は当時妙心寺管長をしてゐられた神月老師を尋ねて、その引受方を交渉したのであつた。

同記事で緒方は、ベック以外の欧米人禅修行者の名前も列挙している。1928年に「出しぬけに京都の大徳寺へやつて来て修行を始め、やがて老師の自坊円福寺へ移」ったミリラム・サラナーブ、他に、ブラックウェルダー、セグリーブ、オリファント、アッカー、スミット、ディンスト、ウィット、フォアマン、マックイ、サンディラヤーナ、神月に弔電を送ったルース・フラー・エバレットも紹介されている<sup>43</sup>。

後述するが、Zen Hospiceの発案者の一人は、確かにアダムズ・ベックであつた。しかし、実際には吉永の指摘通り、Hospice設立には大拙が深く関与、というより主導的役割を果たしている。そして、大拙とともに実務に奔走したのが、臨済宗各派の機関誌『禅宗』主筆、妙心寺派機関誌『正法輪』主幹、妙心婦人会機関誌『微笑』主幹を務めていた後藤光村(義豊)<sup>44</sup>である。1930年代前半に、非日本人専用の居士林を作るといふ試みの新奇性を鑑みると、いつ誰がどう関わつたのか、その設立経緯を解明することは、多少なりとも意義があると思われる。本稿では、Zen Hospiceについて定期的に報じていた『中外日報』、大拙の邦文・英文日記、ピアトリス宛の大拙書簡を参照し、動向を確認したい。

管見の限り、『中外日報』が最初にZen Hospice計画を報じたのは、建立趣意書の約一年前、1929年11月17日付「外人のための僧堂を作らねば不便となつた」である。全文を引用する。

妙心寺派の神月管長は来る二十五日頃有志の集会を開いて外国人のために居士

42. アダムズ・ベックに関しては、栗田英彦「〈研究資料〉国際日本文化研究センター所蔵静坐社資料——解説と目録」『日本研究』47、2013年、239-267頁。

43. これらの人物(サンディラヤーナ以外)に言及する文献と略歴に関しては、末村正代・堀まどか「二〇世紀前半期の米国における仏教者リスト——一九三〇年代の日本人開教使による記録から」『近代仏教』29、2022年、136-147頁。当該リストには、ここで挙げられていない神月の弟子、Zen Hospice来訪者も複数掲載。

44. 後藤光村に関しては、読売新聞社編『宗教大観』四、読売新聞社、1933年、332頁。

林でも作らうかといふ相談会を開く。外人の僧堂入りはこれまでも珍らしくなかつたがこの頃都ホテルに宿泊中の三外人が鈴木大拙氏を通じて臨濟の寺で指導をうけたいといふ申出があり、臨濟禪に対する求道熱が外国人中にも相当強いので僧堂の中に入れては規矩に困る点があり何とか施設を考へやうといふのである。<sup>45</sup>

おそらくこの相談会は、1929年12月3日に開かれた。大拙の邦文・英文日記によると、大拙、後藤、ビアトリス、大拙家使用人関口この、ブラックウェルダー(Blackwelder)の5名が円福寺で神月と面会している。この会合をうけて、同月24日には、「外人の為の僧堂問題 国際道場の実現？」[中外 19291224/2]が掲載される。記事には、神月の自坊である円福寺境内なら土地提供が可能、具体化は大拙と後藤に一任とある。また、「基教女子青年会に泊つて」いるブラックウェルダーと、來日を希望する海外からの手紙類を示し、日本側の対応を求めてきた女性、すなわちアダムズ・ベックも紹介されている。記事は、「他に類例を見ない臨濟禪を外国人が憧憬して集つてくる今日の機運は、遅かれ早かれやがては国際僧堂の建設となつてあらはれて來るに相違ない」と結ばれる。

年が明けると、後藤による「外人禪堂建立縁起」[中外 19300101/25]、「外人禪堂建立縁起(承前)」[中外 19300105/1]が掲載される。Zen Hospiceに関して多くの問い合わせを受けたとして、比較的詳しく経過と縁由が書かれている。近代以降、東洋思想、殊に仏教が欧米人から注目されており、実地修行の指導者が直授する場を企画していると述べたうえで、計画と大拙の関係に触れる。1月5日分からの引用である。

然るに最近、我が臨濟禪を実地修行にでかけらるゝ人々が極めて多くなつて來た。……何時も鈴木大拙居士から、其の何れの禪堂へ來朝參禪外人を紹介するかを、屢々相談されるが、私はこれに明答を与へ得ぬことを常に遺憾に思つて居る。……鈴木大拙居士と相会する度に何んとかならぬものかと語り合つてゐたが、最近、同居士からブラックウェルダー。アダムズ・ベック。ヘーズ。の三人の外人を紹介され、大拙夫人ビアトリス女史が伴つて妙心寺に私を訪ねられた際も、それらの人々が頻りに參禪希望あり、何れか參禪道場の適當なる紹介を依頼されたので、……九州の御親化を終つて歸山さるゝ妙心管長清竹軒神月徹宗猥下を待ち兼ね、……最も意義深き最初の懇談打合せをなし、更に十二月三日鈴木大拙居士並に參禪外人と共に円福寺に赴き、第二回の会合をなし

45. 「外人のための僧堂を作らねば不便となつた」『中外日報』、1929年11月17日2面。以下、『中外日報』からの引用は[中外 日付/面数]と略記。



十二月十二日、妙心開山忌の佳辰第三回の相談会を為す。

ここで、第一報の「三外人」が、ブラックウェルダー、アダムズ・ベック、ベックの秘書ヘレン・ヘイズであると判明する。緒方記事とも重複するが、カービー、サラナブ、ゴダード、フェルプスの名も挙がっている<sup>46</sup>。

記事には、Zen Hospice 計画以前から大拙は後藤に相談していたとあるが、そもそも大拙のもとに欧米人が集ったのは、1920年から、大拙とビアトリスが神智学ロッジ（東京・国際ロッジ、京都・大乘ロッジ）に関わっていたことに起因する。当時の神智学ロッジは、種々の東洋思想に関心がある欧米人の社交場となっており、その中心は、自らも東西の秘境思想に関心をもっていたビアトリスであった。吉永進一は、欧米人を手助けするビアトリスに関して、「おそらく彼女がいなければ、大拙夫妻が海外の仏教者たちのネットワークのハブになることはなかったであろう」<sup>47</sup>と指摘している。戦後に入ると、知名度を上げた大拙を頼って来日するケースも増えるが、当該記事の時点では、大拙よりもビアトリスの方が、在日欧米人に対する求心力は強かったと見てよい。この点は、ビアトリス宛の大拙書簡からも窺える。Zen Hospice 設立の契機となった、アダムズ・ベックやヘレン・ヘイズ、緒方記事のエバレットやサラナブも、計画が立ち上がる以前から大拙書簡に登場する。高野山や京都を訪れる彼らの世話をビアトリスが担い、受け入れ寺院の手配などを大拙がおこなっていたようである<sup>48</sup>。

詰まるところ、以前からビアトリスを通じて「参禅外人」と交流のあった大拙が、彼らの滞在先や修行先を後藤に相談、次第にその数も増え、需要が大きくなってきた1929年夏、直接的には、ブラックウェルダー、アダムズ・ベック、ヘレン・ヘイズを大拙が後藤に紹介した段階で（大拙は10月29日に都ホテルでブラックウェルダーらに面会〔松ヶ岡年報 19/152〕）、後藤は妙心寺派管長の神月に Zen Hospice 設立を直談判することを決意、11月13日に神月と最初の懇談をもち（『中外日報』第一報）、12月3

---

46. 各人物（フェルプス以外）に関しては、末村・堀、前掲。栗田英彦によると、Zen Hospice で修行者が体調を崩した際、大拙は静坐社の小林信子のもとへ行くよう助言していたらしく、後に、Zen Hospice 入所前には2週間静坐をおこなうことになったという。栗田、前掲、248頁。

47. 吉永進一「大拙夫妻と神智学——大拙英文日記とビアトリス資料を参照して」『松ヶ岡文庫研究年報』33、2019年、6頁。

48. 大拙はビアトリスに宛てた書簡のなかで、彼らの対応に疲弊しているであろうビアトリスをしばしば気づかい、労っている。例えば1929年7月26日、「親密になりすぎると、何かと失望する。彼女に多く期待しないように」〔大拙全集 36/513-514〕など。なお別件であるが、1929年夏は、バーネット夫人の支援を受けて、ビアトリスが「バーネット記念動物愛護慈悲園」を開設した時期でもある。大拙はこの活動にも協力。日沖直子「鈴木ビアトリスと動物たち——松ヶ岡文庫所蔵資料にみる」『松ヶ岡文庫研究年報』33、2019年、25-45頁。同「鈴木ビアトリスの動物愛護論における仏教と神智学」『松ヶ岡文庫研究年報』34、2020年、21-42頁。

日に大拙と「參禪外人」が円福寺に赴いて2回目の会合、同月12日に3回目の会合、関連記事への反響が大きく、翌1930年正月の『中外日報』に後藤の「建立縁起」が掲載されたという経緯であった。

1930年夏も、ピアトリスは高野山で真言密教を学び、ベックらと合流する<sup>49</sup>。そして、同年11月3日、『外人禪堂建立趣意書』が発表される。「東洋文化の粹として、これ〔禪〕を西に移植すべき方法を考ふべきは、亦吾徒の務であらねばならぬ」という書き出しではじまり、大乘仏教を求める欧米人が次第に増えていることに触れた後、設立動機を次のように述べる<sup>50</sup>（趣意書後半は英文版）。

大乘教の学問的研究は、梵語の原典又は漢文及び西藏文によりて、為され能ふ。がこれが実地の修行は何んと云つても禪より外になし。何んとなれば、釈尊成道の端的は禪によらなくては見得し難きからである。

禪の真髓を解するは、東洋人でも容易の事でない、殊に欧米人の如く何等歴史的背景を持たぬものに至つては一層困難であるが、道には時の古今洋の東西がないから、何等かの方便によりて、いくらかなりとも、これに近づき得る道を講ずるは、吾等禪徒の務ではないか。

『中外日報』には、以後も何度か続報が掲載される。1930年11月「外人道場で外人の大喜び 役員の顔触れきまる」[中外 19301130/2]では、神月を発起人として、京都府知事、京都市長、大拙、後藤光村、後藤亮一ら理事、臨濟宗各管長、各師家ら顧問、賛助員らが続々集合と報じられ、京都ホテル滞在中のベックとヘイズも、賛助員に名を連ねている<sup>51</sup>。1931年1月「外人道場の促進懇談 知事、市長を入れて発起人会」[中外 19310127/3]では、同日に発起人会開催、趣意書を作成して、寄付金勧募に入るとある。同日の大拙英文日記にも、「妙心寺派管長が管理する外国人仏教徒のホスピスの件で都ホテル」[松ヶ岡年報 20/33]と記されている。1931年8月「勧募に着手」[19310813/4]には、第2回発起人会で「第一期工事費として五万円を勧募」することとなり、実動に移るとある。同年秋以降は、大拙邦文日記からも、後藤や神月と面会する様子が窺える。1931年11月8日には「午後4時妙心寺神月徹宗管長と雲水来る、点心供養」[桐田年

49. 大拙に何かを相談していたようで、1930年9月5日付書簡で、大拙は、「ベック夫人や他人のことは気にしないように。一意専心で自分の仕事に打ち込むことだ。人生は短く、我々がやるべき仕事は多い」[大拙全集 36/556-557]と論している。

50. 終盤では、Zen Hospiceの試みが外国人誘致政策にも資すると強調される。吉永も前掲の解説で、外貨獲得を目的とする当時の国策に言及。

51. しかし、直後の1931年1月3日、ベックは京都で没する。「故ベック女史の蕭かな追弔会」[中外 19310203/3]、1月31日に円福寺で神月を導師として追弔会。

譜 77]、同月 27 日には「夕刻後藤義豊（光村）来る」[桐田年譜 同]、12 月 20 日「神月徹宗管長来訪」[桐田年譜 78] とある。同年冬の *Buddhism in England*<sup>52</sup> には、「欧米仏教徒のための Zen Hospice」と題して、「仏教、とりわけ禅の瞑想体系を学びに来日する欧米人の宿泊施設として、シンプルで相応しい設備を低価格で提供するホスピスを建設する予定」と謳う広告も出している。こうした状況は、翌年もつづく。1932 年 7 月 11 日「夕刻円福寺の神月徹宗管長来訪」[桐田年譜 80]、9 月 23 日「後藤光村点心来訪」[桐田年譜 82]、10 月 26 日「午後神月徹宗円福寺管長来訪」[桐田年譜 同]、献堂式の 11 月に入ると、英文日記上では Hospice のリーフレット納品をめぐる三秀舎とのやりとりが増え、式前日にリーフレットを受領している。

1932 年 11 月 20 日、Zen Hospice 献堂式が挙行される。これに関しては、1933 年 6 月 *Eastern Buddhist* が、献堂式を報じるとともに、リーフレットを引用している<sup>53</sup>。引用を見る限り、大拙が手配したこのリーフレットの英文と、『外人禅窟建立趣意書』後半に付された英文は、ほぼ一致する（趣意書のみ資金協力を募る文言が有る）。吉永の推定通り、趣意書も大拙が作成したと考えるのが妥当であろう。瞑想のための岩屋 Meditation Cave や、寝床や机と椅子が設えられた部屋の写真も転載されている。内容は、日本語がわからない人にも禅の教授が可能、禅寺の習慣から本質的で重要なものだけを残し、なるべく欧米人の生活様式に沿った形で、禅の修行・指導・精神が身につく静かな場所を提供することが目的とある。キッチン等の設備、食費や電気代、注意事項、要紹介状の旨など比較的細かく書かれており、最後に寄付が推奨されている。申し込み先には、神月と大拙が併記されている。

以上が、円福寺 Zen Hospice 設立の経緯であった。Hospice が存続した期間は不明であるが、前掲の緒方による神月追悼記事に「老師は更に大きな努力と犠牲とを甘じて近く外人禅堂の拡張、それに先立つ老師自身の外游等を計画されてゐた」とあるので、1937 年 10 月 6 日、神月が横死した時点で拡張計画があったことは確かである。Hospice 開設後も、大拙、後藤、神月の交流はつづき、1936 年 5 月 20 日の邦文・英文日記には、ビアトリスも含めて琵琶湖ホテルの精進料理を食べたとある [桐田年譜 94] [松ヶ岡年報 25/15]。

それでは、上記の Zen Hospice 設立経緯と、当時在ロサンゼルスであった千崎は、どう結びつくのか。実は、緒方記事や後藤の『中外日報』記事、ビアトリス宛大拙書簡で

52. "A Zen Hospice for Western Students," *Buddhism in England*, vol. 6, nos. 5-6, November-December 1931, p. 102. 同誌は 1926 年創刊、クリスマス・ハンフリーズが主宰するロンドン仏教ロッジの機関誌。もともと神智学協会のロッジであったが、1926 年に独立。*Buddhism in England* に関しては、日沖、前掲、2020 年。

53. "Notes: The Zen Hospice," *Eastern Buddhist*, vol. 6, no. 2, pp. 192-196.

名が挙がっている欧米人のなかに、千崎の弟子が複数含まれている<sup>54</sup>。

一人目は、記事にも書簡にも多く登場する、サラナーブである。彼女は、千崎の紹介状を携えて、Zen Hospice のきっかけとなった「三外人」と同時期、1929 年に來日している。千崎はもともと、宗演門下の兄弟子である臨濟宗方広寺派管長、間宮英宗<sup>55</sup> に彼女の受け入れを依頼していた。

ミセスサラナーブのことにつきて種々ご配慮にあづかり御かげにて主人はじめこゝの白人一同大喜びいたし居候。あの婆公はととも劉鉄磨になり得ぬらしく候へど信の花さゝやかながら美しきところなきにあらざり行末ながく御示教のほど御願申上候<sup>56</sup>

緒方によると、サラナーブは 1929 年 4 月 29 日來日、4 ヶ月は大徳寺の円山全提（要宗）のもとにおり、その後、神月がいる円福寺へ移っている<sup>57</sup>。ビアトリスや大拙、同時期に日本に滞在していたアダムズ・ベックらとも連絡を取り合っていたようである。管見の限りでは、このサラナーブが、Zen Hospice 開設前、最初に円福寺を訪れた欧米人であったと考えられる。というのも、大拙は 1929 年 8 月 18 日付ビアトリス宛書簡で、八幡にいるサラナーブから電報が届いたと報告しているのだが、その際に八幡の場所を説明しているのである〔大拙全集 36/524-525〕<sup>58</sup>。つまり、この時点では、ビアトリスは円福寺について詳しく知らなかった、彼女の周囲に円福寺を訪れた欧米人はいなかったということになる。同書簡では、ビアトリスに「円福寺に行くのはどうか」とも提案している。その後、大拙は、9 月末にサラナーブ〔松ヶ岡年報 19/151〕、10 月にはベックや

54. 今回は触れないが、カービーもゴダードも、アメリカで千崎とつながっている。カービーは 1920 年代に千崎の活動を助け、ゴダードは東漸禪窟に通っていた。両者はサラナーブ以前の來日修行者でもあるが、カービーは円覚寺、ゴダードは相国寺で、円福寺を訪れた形跡はない。

55. 間宮英宗に関しては、禅学大辞典編纂所編『禅学大辞典』下、大修館書店、1978 年。

56. 村野孝顕編『仏教海外伝道史』北米山禅宗寺、1933 年、『仏教海外開教史資料集成』3、不二出版、2008 年、322 頁。村野孝顕は、1930 年から約一年半、東漸禪窟に寄宿していた曹洞宗開教使。

57. 緒方宗博「欧米人の見たる禅」、秋山範二ほか『禅と生活・禅の典籍・欧米人の禅』、雄山閣、1941 年、6-7 頁。離日後は 1929 年暮にインドを訪問（あるいはその前に中国を経由）、翌春再来日して帰米したようである。後にミャンマーやバングラデシュの仏教会も訪れたが、結局はサンフランシスコで「西部婦人仏教通報局」を開設、仏教の普及に努めた。緒方宗博「外人禅を語る」『国際仏教通報』2 (4)、1936 年、19 頁。「ニュース：最初の英文仏教雑誌？」『海外仏教事情』3 (5)、1936 年、22-23 頁。

58. サラナーブと大拙の最初の接触は 1929 年 4 月 30 日、イグチなる人物を含めた夕食〔松ヶ岡年報 19/142〕。5 月 6 日には、大拙が大徳寺の円山全提を訪ねてサラナーブを連れ帰る〔松ヶ岡年報 同〕〔桐田年譜 65〕。その後も、時にはサラナーブをともなって、たびたび大徳寺を訪問。

ブラックウェルダールと会い [19/151-152]、12月になると、後藤の『中外日報』記事が報じたように、Zen Hospice 計画が本格的に始動する。もちろん、ビアトリスをハブとした大拙夫妻と欧米人とのつながり、臨済系各誌の主幹であった後藤と大拙とのつながり、後藤の所属する妙心寺派の管長であった神月による自坊の敷地提供が、Zen Hospice 実現の要であるが、その端緒には、千崎の弟子も関与していた。また、サラナーブの円福寺訪問が、Hospice 候補地の選定に影響を及ぼした可能性もある。

直接的な関わりが見られる人物としてサラナーブを取り上げたが、当時の来日欧米人のなかには、他にも千崎の弟子がいる。サラナーブの約半年後に来日した、コルボン (L. A. Colburn) とオルムスビー (F. M. Ormsby) という青年である。千崎が執り行なった二人の得度式は、*Los Angeles Times* などで「アメリカ初の僧侶」として大きく取り上げられた<sup>59</sup>。彼らの来日もまた、Zen Hospice 計画進行中の1931年であった。僧堂修行を希望していた二人は Zen Hospice のターゲット層ではなく、ビアトリスやその周囲の富裕層女性と交わることもなかったが、彼らの来日もまた、ある意味では Zen Hospice の建設を後押しした<sup>60</sup>。大拙は二人を認識していたようで、1930年7月19日付ビアトリス宛書簡では、千崎の弟子が本当に修行に来そうだと伝え [大拙全集 36/543-544]、来日後の1931年8月25日付書簡には、「大徳寺に行って、アメリカ人青年僧二人がどこでどんなことに直面しているのかを探ることが気に入っている」 [大拙全集 36/571-574] など綴っている<sup>61</sup>。前述したように、ちょうど第一期工事費の勧募に入る時期であり、二人の修行を観察しながら、Hospice のあり方を探っていたと考えることも可能であろう<sup>62</sup>。

以上が、八幡・円福寺 Zen Hospice の設立経緯と、これに関連する千崎の動向である。

59. 拙稿、2023年、198頁。来日後、一旦大徳寺に入ったものの、その後は行方不明。

60. 二人に関する『中外日報』記事は2件。一つは、前述の間宮英宗宛の千崎書簡である。当該書簡の主目的は、サラナーブではなく、二人の受け入れを間宮に依頼することであった。千崎自身が、書簡全文を『中外日報』に寄稿。掲載日は奇しくも後藤の「外人禪堂設立縁起」と同じ1930年1月1日、同日掲載の後藤記事と千崎書簡は、来日修行に対する欧米人の関心と需要の高さを示す好材料となっている。もう一つは、1931年2月「愈々外人道場建設を急がせる珍客来 さしずめ大徳寺へ」 [中外 19310210/2] で、珍客扱いされているものの、記事は千崎にも言及しており、「こうした珍客がある以上是非禪宗の外人道場は生まれねばならぬと関係者は大に油をかけてゐる」と結ばれる。

61. 拙稿、2023年、212頁。なお、左記論文の当該部分に誤記があったため、この場を借りて訂正しておきたい。註66で、ビアトリス宛の大拙書簡「一九三〇年六月一四日、一九三一年八月二五日」に二人の名があるとしたが、正確には「六月一四日」ではなく、次の「七月一九日」書簡であり、内容も「two young monks」や「young American monks」で、名前は明記されていない。しかし千崎の名は挙がっているため、大拙が二人を千崎の弟子であると認識していたことは間違いない。

62. 今回は取り上げないが、緒方記事に名が挙がっていたセグリーブ (Kristin Seglyev 宗玉) も千崎の弟子の一人。



Zen Hospice は、きわめて欧米寄りの短期滞在型居士林であり、次に述べる三宝教団修行ルートとは相違点もある。しかしながら、欧米人の来日禅修行ごく初期の段階で、日本側が彼らの需要との交叉点を模索したことは、後の欧米展開の素地となる現実的で具体的なビジョンを提供したと考えられる。その点では、意義のある試みであった。

## 2-2. 欧米人指導者を育成した三宝教団修行ルート

次いで、三宝教団を経由する来日修行ルートの形成を取り上げる。現在、アメリカ各地の禅堂や禅センターでは、多くの欧米人禅指導者が活躍している。正確な実数把握は難しいが、試みにアメリカ禅指導者協会 (American Zen Teachers Association: AZTA)<sup>63</sup> が公開している禅指導者会員リストを参照すると、アメリカを拠点とする指導者は 225 名、彼らの活動場所は 148 施設となる。既述の通り、北米禅の成立は、欧米人指導者の誕生と密に関連している。言語的制約がなく、母語で指導できる彼らによって、北米禅の間口は大幅に広がった。しかしながら、指導者を育成するためには、Zen Hospice のような短期滞在型居士林ではなく、年単位で僧堂に近い修行を提供できる場が必要となる。とりわけ、ほぼ前例がない初期の段階では、来日せざるを得なかった。たとえ来日を実現しても、アメリカにいる師の紹介状を携えて師と縁故ある禅僧を訪ね、修行の許可を得る必要がある。修行中も、坐禅・提唱・入室参禅に順応することが求められる、期間も長い。必然的に選択肢は絞られ、限られた僧堂に欧米人修行者が集中、特定の場所に受け入れ実績が蓄積される。

上述の状況で、比較的多くの欧米人修行者を受け入れたのが、安谷白雲が創設した三宝教団である。ハワイでダイヤモンド・サンガを設立したロバート・エイトケンや、ロチェスター禅センターを設立したフィリップ・カプロー (Philip Kapleau) も三宝教団を経由している<sup>64</sup>。

三宝教団について略述しておきたい<sup>65</sup>。三宝教団は、1948 年に曹洞宗から離脱した安谷白雲が、1954 年に設立した宗教団体である (2018 年「三宝禅」に改称)<sup>66</sup>。その特徴

63. 1980 年代後半に設立。20 世紀後半期に、日本・中国・韓国・ベトナムなどアジア系指導者から教えを受けて指導者となった第 2 世代が主要構成メンバー。リストは、指導者の氏名、活動場所、所在地、系統、組織名から成り、現時点で 242 名の指導者が挙がっている。American Zen Teachers Association, <https://zenteachers.org/>, accessed March 27, 2023.

64. 禅修行希望者だけでなく、愛宮真備 (フーゴ・ラサール) などキリスト教からも修行者を受け入れていた。堀まどか「キリスト教と禅——エノミヤ=ラサールのふるさと」、郭南燕編著『宣教師の日本語文学——研究と目録』第六章、勉誠社、2023 年、149-171 頁。

65. 安谷に関しては、「白雲量衡大和尚略歴」『大乘禅』50 (8)、1973 年、11-14 頁。

66. 1948 年 9 月 6 日に「離脱通告書」(安谷量衡「宗団離脱の理由三箇條」『大乘禅』25 (13)、1948 年、19 頁)。1951 年には東京都練馬区関町に三宝興隆会関町道場を開いて機関誌『曉鐘』を創刊、1954 年 1 月 8 日に三宝教団が宗教法人として認証される。

を端的に表現するなら、只管打坐を標榜する曹洞宗の黙照禪に、臨済宗の公案参究を導入した点にある。この特徴は、安谷の師、正信論争<sup>67</sup>で忽滑谷快天と対立した原田祖岳に由来している。「看話黙照両禪の融会は、之れ真実仏法の一大関門を透過せしむる金札であると信ずる」と言い、「公案無公案といふも、正に打成一片」<sup>68</sup>とした原田の見解は、曹洞宗大学林卒業後に曹洞・臨済両宗の高僧を訪ね歩き、修行を重ねたことで形成された<sup>69</sup>。歴参した高僧の一人、当時臨済宗南禅寺派管長であった豊田毒湛から印可を受けたとも言われる<sup>70</sup>。福井小浜・発心寺に晋山して以降は、年6回(4、5、6、10、11、12月)接心を実施するなど、徹底的な実参派であった。

原田に心酔して師事し、約20年にわたって発心寺接心に参加した安谷もまた、黙照禪だけを認め、公案や見性を批判する曹洞宗の宗派峻別的なあり方には批判的であった。当然、原田から安谷、三宝教団へと継承されたこの系譜が主流となることはなく、三宝教団はごく小規模な団体にとどまった。ところが、アメリカに視線を移すと、存在感は増し、主要系統の一角を占めるようになる。『宗教年鑑』令和4年度版の教師数の項目と、先のAZTA指導者リスト(アメリカ拠点の225名)のLineageの項目との比較が、以下である<sup>71</sup>。後者は自己申告制のため、厳密な宗派区分とは言い難いが、一つの目安と

67. 駒澤大学学長であった学究派の忽滑谷が、師家側を束ねた実参派の原田と、見性悟道の必要性に関して対立、曹洞宗を二分する論争となった。発端となった記事は、忽滑谷快天「正信」(『星華』1928年8月創刊号)と、原田祖岳「須らく獅虫を駆除すべし」(『公正』同年9月号)。

68. 原田祖岳『禅学質疑解答』禅門叢書10、丙午出版社、1917年、97-98頁。

69. 「千葉県地済院・安国寺を歴任し、ついで丘宗潭・秋野孝道・星見天海・安達達淳の門に入ったが満足せず、京都南禅寺の毒湛に参ず」。禅学大辞典編纂所編『禅学大辞典』下、大修館書店、1978年、1031頁。

70. 安谷を継いだ三宝教団二祖、山田耕雲は以下の原田の言葉を紹介。「衲〔原田〕が毒湛老師から印可(室内の調べが了った意味)を受けた時に、毒湛老師が仰せられるには、曹洞宗は一大宗である。宗門の中に正師が無くて、臨済宗の師家から印可を得て来たということになると、曹洞宗の面目に関するから、これは秘しておきなさい。……それで衲が毒湛老師の印可を受けたということは、軽々に口外しないのだ」。山田耕雲「白雲室老漢の骨頂」『大乘禅』50(8)、1973年、28頁、〔〕内引用者。なお、曹洞・臨済を兼修した近代の禅僧としては、総持寺貫主を務めた渡邊玄宗もいる。

71. 文化庁編『宗教年鑑 令和4年度版』文化庁、2022年。日本国内では、宗教団体数、宗教法人数、信者数等、いずれにおいても曹洞宗が約70%、臨済宗諸派合計が25~30%程度、黄檗宗が1~2%程度、三宝教団は1%未満。AZTAリストの三宝教団はSambo / Sanbō / Sanbo / Harada Yasutani、曹洞宗はSoto / Dharma Cloud、臨済宗はRinzaiを含む。後述のエイトケンとカブローの系統も三宝教団に含める。なお、ハワイ大学のHelen J. Baroniは、『The Complete Guide To Buddhist America』(Don Morreale(ed.), Shambhala, 1998)にもとづいた1910~1997年の禅関連施設設立数の推移と、当該施設の所属系統に関するリストを示し、三宝教団の地位が日本とアメリカで異なる点に言及。Helen J. Baroni, *Love, Rōshi: Robert Baker Aitken and His Distant Correspondents*, SUNY Press, 2012, pp. 39-40. ただし、欧米人指導者が必ずしも一系統に属するとは言えないことも付記しておきたい。岩本明美「アメリカ禅の誕生——ローリー大道老師のマウンテン禅院」(『東アジア文化交渉研究』別冊6、2010年、11-31頁)で取り上げられた、ローリー大

したい。アメリカでは、三宝教団の比率が飛躍的に上がる。

表 1

日本：『宗教年鑑』 教師数		アメリカ：AZTA リスト 指導者の系統
15,296 (71.4%)	曹洞宗	154 (68.4%)
5,278 (24.6%)	臨済宗諸派	17 (7.6%)
412 (1.9%)	黄檗宗	0 (0%)
21 (0.1%)	三宝禅 (三宝教団)	32 (14.2%)
21,417 (禅系小計)		225

なぜ、日本では小規模団体にとどまる三宝教団が、欧米人修行者に知られるようになったのか。実は、両者をつなぐルートに千崎が関わっている。正確に言うならば、両者を結ぶ機縁となったのは、千崎と中川宋淵との国を越えた交流、中川と安谷の宗派を越えた交流にあった。三宝教団が欧米人修行者を受け入れ、欧米人指導者を輩出する主要な場となり得たのは、そこに至る千崎—中川—安谷というルート（場合によっては大拙や原田も経由）が存在していたからである。

千崎と中川、中川と安谷、それぞれのつながりを略説したい。説明にあたっては、このルートをたどり、帰国後に自らの禅堂を立ち上げた代表的事例として、ロバート・エイトケンの来日修行を適宜参照する。

まず、千崎と中川の交流であるが、両者の接点は、1934年まで遡る。その年、千崎は弟子の秋旻から『婦人公論』に掲載された中川の記事、雲水栄淵「木食物語」<sup>72</sup>を勧められた。中川の厳格な木食行と詩文に感銘を受けた千崎は、すぐさま手紙を書き、両者の交流がはじまる。1949年と1955年の中川の渡米と1955年の千崎の一時帰国、相見したのは3回限りであるが、千崎が没する1958年まで文通はつづいた。中川宛の千崎書簡には、近況や詩歌などが綴られているが、禅ブームが興りつつあった1950年代半ば以降になると、渡日する弟子の受け入れを依頼する文言が登場してくる。1956年3月から6月には、以下3名を中川に依頼している。

道 (Daido John Loori) など。

72. 『婦人公論』19 (11)、1934年11月所収。東京帝国大学在学中から坐禅会に通っていた中川は、卒業2年後の1931年得度、当該記事執筆の頃は、しばしば大菩薩峠に籠もって独接心をおこない、木食に徹していた時期。中川は、1931年に飯田蛇笏にも入門しており、俳人としての評価も高い。『婦人公論』等の記事は、明白庵宋淵『詩龕 第1輯』（詩龕堂、1936年）として出版され、中里介山、飯田蛇笏、北原白秋が跋を寄せている。

1956年3月20日、Ruth Stout McCandless (寒月)、「どうぞよろしく御指導御願いたします。……アメリカの女雲水として参るのでありますから、通訳も案内も不用 直ちに「頼みませう」と玄関に低頭することとせう」[禅文化 143/52]。

同年5月25日、Robert P. Jackson、「右のものも早晚御伺すると申してあります けふアドレスを教へてやりました 加州大学の大学院生です 卒業の上は兎も角も貴師の御許へあがりたくと申します 其折はどうぞよろしく御願申上ます」[禅文化 143/57]。

同年6月30日、Dr. McCullough、「DR McCULLOUGH 参叩の由どうぞよろしく御願申上ます 光・マツクロ氏とは面白い音訳ですネ どうか厳しく御しつけ下さい」[禅文化 144/120]。

欧米人だけでなく、日系二世にも修行希望者がいたようで、1957年には添書をもたせて、中川のもとに送っている。「これからこんなのは時々参りますから常住の迷惑にならぬやう御下命いたゞきたい」と綴り、帰国した弟子から話を聞いた禅窟のメンバーの様子として、「まるで回教徒がメツカを思ふやうに誰も彼も龍澤にあこがれてゐます」[禅文化 148/133] と報告している。晩年に差しかかっていた千崎は、東漸禅窟の後を中川に任せることも考えていた<sup>73</sup>。

おそらく、この千崎—中川ラインを最初に通ったのが、エイトケン<sup>74</sup>である。千崎と

---

73. エイトケンは、千崎との初対面の場で中川の写真を見たことを述懐し、「宋淵和尚がいずれ自分の後継者としてアメリカに定住することを望んでいた」と語っている。Robert Aitken, *Original Dwelling Place: Zen Buddhist Essays, Counterpoint*, 1997, p. 15. 実際には、1951年4月の中川の龍澤寺晋山でこの件は諦めたようで、以降、日常的な指導は定住する別の僧侶に任せ、中川には定期的に渡米して接心を実施してもらうことを望んでいた [禅文化 149/127]。千崎が親しく文通していた思想家、高田集蔵も、千崎の訃報を知らせる弟子からの書簡に、「誰れか師のあとを襲うて禅窟の法燈を相続するお方がありますか。千崎は出来れば中川宋淵氏にあとを継いで貰いたいように願っていたのではありませんか」と返信。高田集蔵著書刊行会編『高田集蔵千崎如幻書翰往来—竹鄰庵と東漸禅窟』高田集蔵著書刊行会、1972年、289頁。結果的には、日常指導は1964年に渡米した嶋野栄道、接心は安谷が担うこととなった。嶋野は龍澤寺の中川門下ではあるが、千崎とのつながりは浅く、嶋野がアメリカ本土へ渡ったのも千崎没後である。さらに、嶋野は本拠をニューヨークとしたため、厳密には、西海岸の弟子を中心とする東漸禅窟を継承したとは言い難い。

74. エイトケンに関しては、以下の二書を参照。Robert Aitken, *Original Dwelling Place: Zen Buddhist Essays*. Helen J. Baroni, *Love, Rōshi: Robert Baker Aitken and His Distant Correspondents*.

エイトケンの初見は1947年であるが、その遠因は、太平洋戦争下のエイトケンとイギリス人文学者 R. H. ブライスの出会いにあった。戦前から俳句に関心があったエイトケンは、神戸の敵国人抑留所に収容されていた折にブライスと出会い、俳句を通して禅に関心を抱く。戦後、1947年にハワイ大学で英文学を修めた後、カリフォルニア大学大学院で日本学を学びはじめるが、この年のクリスマス休暇に、当時千崎が仮住まいにしていたミヤコホテルで初対面を果たす<sup>75</sup>。しばらく千崎のもとで坐禅をつづけていたが、1949年にハワイに一旦戻り、1950年にはハワイ大学で日本学修士を取得した<sup>76</sup>。

1949～1950年に帰省したハワイでは、当地で開催されていた第2回東西哲学会議に出席した大拙とも知り合い、來日修行を勧められている<sup>77</sup>。奨学金を得て來日を敢行、最初に円覚寺の接心に参加した。ところが、予想を超える厳しさで挫折、次に向かった先が、中川のいた三島・龍澤寺であった。エイトケンは、自らが千崎の弟子であることを綴った手紙を中川へ送り、受け入れを依頼した。とはいえ、やはり僧堂修行は困難が多く、7ヶ月後に体調を崩し、翌1951年夏には大拙に勧められて松ヶ岡文庫で2週間療養している。態勢が整っていなかったこともあり<sup>78</sup>、エイトケン自身の來日修行は成功裏には終わらなかったが、後に來日したカプロー<sup>79</sup>や前述の千崎の弟子たちが、最初

75. 最初の目的地はオハイであったが、クリシュナムルティ不在で会うことができなかった。書店で遭遇したハワイ大学時代からの知り合い、リチャード・ガード (Richard A. Gard 当時はクレアモント大学で仏教学の博士論文を執筆中) から千崎の話聞き、訪問。Rick Fields, *How the Swans Came to the Lake: A Narrative History of Buddhism in America*, Shambhala, 1981, p. 201-202. ガードは1950年に博士論文を提出、大拙も審査を務めた。

76. 1949年には中川も初渡米を果たし、東漸禪窟で指導もおこなっているが、エイトケンとはすれ違いとなり相見していない。

77. 大拙もエイトケンの來日を気にしていたようで、ニューヨークから古田紹欽に宛てて、1950年10月26日「エトキン氏が來たとの事、熱心な禪人、よろしく頼む、俳偕に関心を持つはず、荻原氏に紹介して然るべきか」[大拙全集 37/274] や、1951年2月28日「エトキン氏へよろしく、わしの帰る頃には、まだ滞在すると信ずるが、如何」[大拙全集 37/293-294] と書き送っている。

78. そもそも欧米人修行者、とりわけ僧堂修行希望者に不慣れであったことに加えて、エイトケン滞在中の1951年4月、中川は山本玄峰の後継として龍澤寺に晋山したばかりであった。中川はエイトケンに、「あなたの指導者になることはできない」と何度も告げたという。また大拙も、中川の指導能力に疑問があったようで、松ヶ岡滞在中のエイトケンに「彼はなかなかクセのある人だ」と忠告したという。Robert Aitken, *Original Dwelling Place: Zen Buddhist Essays*, p. 19. とはいえ、カプローら二人(註79)の來日時には、多少認識も変化したようで、1953年11月29日エイトケン宛の大拙書簡には、「中川さんは、自分が完全に悟っていなかったので、以前あなたが滞在したときに悟りへ導けなかったと後悔しているようだ。しかし今は、弟子たちに大いに尽力できるほど強くなったと感じているようだ」[大拙全集 37/440] と伝えている。

79. カプローと同時期に來日したバーナード・フィリップスに対して、大拙は一層注力している。1953年6月4日、10月18日の二度にわたって久松真一に指導を依頼し、「従来の老師方では、此種の人々の指導は駄目だと信じます、老居士[久松]の如き人でないと却てぞらすやうな事になり



に中川を訪ねている点を鑑みると、千崎—中川ラインの開通は、欧米人修行者に日米両国の窓口を拓く出来事であったと言える。

帰国したエイトケンには、1952年にハワイ、1953年にはロサンゼルスと移動し、再び千崎のもとに戻る。私生活でいくつか試練があったが、1956年にオハイで出会ったアン・ホプキンスとの再婚で状況は好転、新婚旅行として再来日する。このとき、中川に紹介された修行先が、中川の友人、安谷が創立した三宝教団であった。

それでは、臨済宗の中川と、離脱したとはいえ曹洞宗であった安谷の接点はどこにあるのか。実は、中川は、臨済宗妙心寺派の龍澤寺の住職を務めながら、1952年から発心寺の原田に通参している<sup>80</sup>。先述の通り、原田は曹洞宗の黙照禅に公案を導入した異色の禅僧であり、安谷はその門下として約20年間、発心寺接心に参加していた。つまり、発心寺（原田）が機縁となって、中川—安谷ラインは形成された。欧米人修行者が、中川から安谷へ流れた理由（場合によっては原田を経由）としては、第一には、僧堂である龍澤寺（発心寺）の過酷さであろう。エイトケンもカプローも、僧堂修行で体を壊している。また、僧堂は家族単位での参加が認められない点も関係していると考えられる。実際、エイトケンは、夫婦で修行できる場所として、中川から三宝教団を紹介されたと語っている。居士にも開かれていた三宝教団は、修行形態にもバリエーションがあった<sup>81</sup>。こうして欧米人修行者の数が増えれば、教団内の彼らの比率も上がり、受け入れのノウハウも充実する。さらに、ロバート・シャーフは、三宝教団が「外国人の禅僧に、厳しい修行や外国人への威圧感から逃れるための有効な手段を提供」、つまり、「仏教の複雑で教学的・信仰的・倫理的な教義を「無」のひと言を繰り返すという比較的単純な瞑想修行に還元」するという方法を採用したことが、「禅文学の奥義を読み解くために必要な言語的・知的訓練を積んでいない外国人にとって、とりわけ魅力的」であったと指摘している<sup>82</sup>。

千崎—中川—安谷をつなぐ修行ルートは、以上の経緯で確立された。概括すると、東

---

はせぬかと危む、公案禅の外に禅なしと思つて居るやうな禅師だちは時代おくれで、余り役に立たぬ、西洋に、殊に近代の西洋に向くものは、近代思想に目覚めた禅者でなくては、いけない、絶対にいけない」[大拙全集 37/432-433/〔〕内引用者]と強く書いている。カプローは、中川から発心寺を紹介されて原田、次いで安谷というルート。鈴木宗忠、前掲、139頁。Kenneth Kraft, *Zen Teaching, Zen Practice: Philip Kapleau and the Three Pillars of Zen*, Weatherhill, 2000.

80. 以下、中川の年譜に関しては、鈴木宗忠、前掲、136-147頁。さらに、安谷の略歴部分に、「宋淵老師との道交は発心寺を縁とする」（同書100頁）とある。

81. Philip Kapleau, *The three pillars of Zen: teaching, practice, and enlightenment*, Weatherhill, 1965, pp. 254-268. 中川から安谷へ移った欧米女性の手記が掲載されており、比較的詳しい三宝教団の描写がある。

82. Robert H. Sharf, "Sanbōkyōdan Zen and the Way of the New Religions," *Japanese Journal of Religious Studies*, vol. 22, no. 3/4, The New Age in Japan (Fall, 1995), pp. 417-458.

漸禅窟に通っていた欧米人弟子が来日修行を希望し、千崎と交流のあった中川の龍澤寺（臨濟宗）を訪れ、さらにそこから、中川と交流のあった安谷の三宝教団（曹洞宗から離脱）へ移ったというわけである。国境と宗派をまたぐ、一見すると無軌道な来日修行ルートは、彼らの交流を基盤として成立した。このルートを通過することで、エイトケンやカプローら欧米人指導者が生まれ、帰国した彼らが「欧米人による欧米人の指導」を実現したのである。

### 3. 結び

以上、戦中の強制収容所期、戦後の禅ブーム期を中心として千崎如幻の活動をたどり、その後半生を跡づけた。加えて、円福寺 Zen Hospice と三宝教団修行ルートという欧米人の来日修行を支えた日本側の仕組みが、いかなる経緯で設立・確立されたかを考証し、両者の起点に千崎とその弟子が関与していることを明らかにした。冒頭で述べたように、北米禅は、戦後アメリカのみを舞台に展開したものではなく、日本人禅者の渡米と欧米人仏教徒の誕生、欧米人仏教徒の来日と日本側の伝統や慣習の再編、欧米人指導者の帰米と新しい禅関連施設の設立という 20 世紀前半からはじまった相互的プロセスを経て、形成・拡大・定着している。戦前に渡米した千崎をはじめとする日本人禅者や大戦間期の Zen Hospice、戦後の三宝教団修行ルートは、そうしたプロセスの欠くべからざるピースであったと言えるであろう<sup>83</sup>。

すえむら・まさよ  
（南山宗教文化研究所）

---

83. 執筆にあたり、千崎久男氏から千崎如幻親族資料、村野孝和氏から村野孝顕親族資料として、数多くの資料を拝受・拝見いたしました。この場を借りて、深く御礼申し上げます。

※ 本稿は、JSPS 科研費 20H01192, 21K12852 の助成を受けたものです。